Column

菱　十

奈良県の南部、五條市から熊野に向かう西熊野街道(国道168号)を南に下ると、途中に十津川村があります。深い山々に囲まれた人口5,000人にも満たない小さな村ですが、面積は奈良県の約5分の1で、東京23区や琵琶湖よりも大きく、村としては日本一の大きさを誇っています。

幕末維新の歴史が好きな方なら、十津川という地名に特別な思いがあるのではないでしょうか。御所の警備にあたり、蛤御門の戦い・戊辰戦争など数々の戦いに関わったことから、その働きを認められ、維新の時に十津川郷の全村2,233戸がすべて士族に列せられています。十津川村の村章となっている「菱十」の紋は、幕末の十津川郷士たちが京都で郷旗として使っていたものです。

札幌から北に約2時間半、JR札沼線の終点に、一日にわずか3往復の列車が止まるだけの静かな終着駅、新十津川駅があります。この駅のある新十津川町の町章も「菱十」です。

明治22年(1889)8月、十津川郷で大雨が降りました。四国の南海上で停滞していた台風が、ゆっくりとした速度で北上し、19日の昼前に高知付近に上陸して中国地方から日本海に進みました。十津川郷では、17日から雨が降り始め、18日の夜から暴風雨になり、19日の夜になって風はやや収まったものの、強い雨が20日の未明まで続きました。このため、19日夜から20日の午前中にかけて各所で土砂崩れが発生し、十津川郷で249人の犠牲者が出ました。

十津川郷に降った雨を、被害の程度から、日降水量1,000mm、1時間降水量130mmと推定した研究もあります。日降水量のベスト5に入るような大雨です。当時は、気象観測をしていた場所は少なく、記録が残っている和歌山の日降水量は18日が32.4mm、19日が78.1mm、津は18日が0.8mm、19日が55.7mmと、それほどでもありません。ところが、和歌山から60kmほど南の田辺では18日が368.3mm、19日が901.7mmと極端に大きくなっています。地形の影響、気流の影響を強く受けて、局地的に大雨になったと思われます。

天気図(1889年8月19日14時)

全国各地からの義捐金や支援物資もあり、なんとか生活はできていたのですが、被害は深刻で、とても十津川郷で生活を再建できる状態ではありませんでした。水害発生から1ヶ月も経たないうちに、北海道に移住する話が出てきました。「雪解けとともに開墾を始めたい」との長老の説得を受け入れ、十津川郷の2割強にあたる651戸、2,667人が、冬を迎える前に北海道に移住することを決意しました。

10月18日、第一班が十津川郷を後にしました。一行は、胸に菱十の紅章をつけ、紅白の大旗を立て、銃を背負い、先祖伝来の日本刀を携えて、隊列を組んで進んだそうです。吉野郡水害誌に、「再会期しがたく、行進遅々。婦女飲泣、別を告ぐることあたわず。男児も家山を顧望して恋郷の情にたえず、漣然(れんぜん)涙下る者あり。」と、その時の様子が記されています。

十津川郷を出て徒歩で大阪に向かい、汽車に乗り換えて23日に神戸に到着。翌24日に出航し、小樽に向かいました。第二班は10月28日、第三班は11月1日に神戸を出航しています。第三班が小樽に到着したのは11月6日。もう雪が舞っていました。

小樽から途中の市来知(いちきしち)(現・三笠市)までは汽車で、その先の約60kmは歩き、11月18日までに空知太(そらちぶと)(現・滝川市)の屯田兵舎に到着しました。そこで共同生活をして冬を過ごし、雪解けを待って石狩川を渡り、6月にトック原野と呼ばれていた現在の新十津川町に入植しました。

老人、幼子、災害で負傷した人、身重の婦人などもおり、山国育ちとはいえ、初めて経験する北海道の冬は厳しいものがあったようです。北の大地に遅い春が訪れたころには、70名近くが帰らぬ人となっていました。

気象予報士（株)富士ピー・エス顧問　**松嶋　憲昭**